

札幌1月の演奏会

●Kitaraのニューイヤー9日田午後3時、札幌・キタラ。飯守泰次郎指揮、中嶋彰子(ソプラノ)。プッチーニ「トスカ」より「歌に生き、恋に生き」、J・シュトラウス2世のワルツ「皇帝円舞曲」ほか。S5千円~U25・1500円。キタラチケットセンター ☎011・520・1234

●さぼーとさっぽろニューイヤークラシックコンサート 15日田午後7時、札幌・キタラ。さぼーとさっぽろ会員ら限定。

●札幌ニューイヤーコンサート in小樽 16日田午後3時、小樽市市民会館。佐藤俊太郎指揮、山根一仁(バイオリン)。メンデルスゾーンのパイオリン協奏曲、J・シュトラウス2世のワルツ「美し

く青きドナウ」ほか。S4500円~U25・1500円。北海道新聞小樽支社 ☎0134・23・3171

●第585回定期演奏会 22日田午後7時、23日田午後2時、札幌・キタラ。マティアス・パーメルト指揮、イザベル・ファウスト(バイオリン)。メンデルスゾーンのパイオリン協奏曲、ムソルグスキーの組曲「展覧会の絵」ほか。S56500円~U25・1500円。札幌事務局 ☎011・520・1771

●新進演奏家育成プロジェクト~オーケストラ・シリーズ第26回札幌 29日田午後7時、札幌・キタラ。高関健指揮。J・シュトラウス2世のワルツ「春の声」、シヨスタコービッチのチェロ協奏曲第1番ほか。2500円。札幌事務局

茨城県出身。二つ上の姉の影響で、4歳でバイオリンを始めた。はつきりプロを目指すようになったのは東京芸術大を卒業するころ。ドイツ・ケルン音楽大学大学院を修了後、オペラがメインの現地の2オーケストラで活動。二つ目のオーケストラでは第2バイオリンの首席奏者を務めたが、若さや性別、人種的なことも影響し、苦難を味わった。

その後国内に戻り、2年ほど本格的な活動を休止。転機は2008年。4月に札幌の募集があり、姉らに応募を薦められるものの一度は断った。だが、合格者が出ず、8月に再募集



小林美和子
—第2バイオリン副首席—

があると思つた時「これは何かのご縁かなとピンときた」といい、「ほとんど弾いていなかったもので、合格は奇跡みたいなもの」と笑う。最初にキタラのある中島公園へ来た時も「樹木や澄んだ空気がドイツに似ていた」と振り返り、「趣味の遺跡や城巡りなどがあまりできないのは残念だけ

メンバーとの呼吸 大切に

ど、札幌の人は温かい」と感謝する。

入団して7年。今の立ち位置は「呼吸の取り方が何より難しい。みんなが緊張せずに入れるタイミングを計るなど毎回神経を使います」と話す。

1月の定期演奏会はマティアス・パーメルト指揮で、イザベル・ファウストがソリストでメンデルスゾーン「バイオリン協奏曲」を弾く。「この曲は当たり前前に弾くのが難しい曲ですが、彼女なら繊細に弾ききる」とができるはず。同じ楽器として一緒に音を作っていたら

(大原智也)

旭川出身プロデューサー・富田恵一とタッグ

bird 原点回帰の新譜

女性シンガーのbird(バード)が10枚目となるアルバム「Lush」(ソニー)を出した。ソロプロジェクト「富田ラボ」で知られる旭川出身の音楽プロデューサー富田恵一と2人でソウルミュージックやR&Bの要素を取り入れた原点回帰の一枚だ。(大原智也)

—昨年のデビュー15周年を機に1、2枚目のアルバムの曲を再演するライブを行い、「もう一度自分の声とじっくり向き合ったアルバムを作りたい」との思いが芽生えたという。「原点に戻りつつ新しい扉を一緒に開いてくれる人をお願いしたい」と、アルバムのプロデュースなど、2002年からたびたび一緒に仕事をしてきた富田に声をかけ、2人だけで演奏・録音作業を行うことにした。

全10曲はbirdが作詞し、富田が作曲とアレンジを担当。富田は職

人的ともいえるポップな楽曲で知られるが、今作の収録曲はブラックミュージックの要素が強く「最初に音が届いた時には『富田さんからこういう楽曲が出てくるのか』とびっくりした」と話す。

ゆったりとしながらザラリとした音作りの表題曲や、「当初のデモ音源の時から何度も聴きたくなる作品だった」という「Can't Stop」など、1枚目にも通じる

電子的なリズムも効果的に響く。これに対し、王道とも言える美しいバラード「明日の兆し」は、人生を感じさせるストレートなメッセージが印象的だ。「すごくいい曲だったので、メロディーに寄り添える素直な言葉をしっかり選んだ」と振り返る。

「全体では50分もないが、一曲一曲に必要な要素が詰まってきた」と語るbird。「最近音楽をずっと続けることの大切さを感じている。富田さんもそうですが、新しいなと思えるものにも挑みつつ、前に進んでいけたら」



「昨年末の道内7カ所を巡るツアーでは毎日のように温泉に入った」と笑顔を見せるbird

「一曲一曲に必要な要素詰まってる」

国本武春が、この世を去った。5年前にウイルス性脳炎という大病に倒れ、九死に一生を得て高座復帰を果たし、これから円熟期に入るところだった。体調不良とは聞いていたが、55歳とはあまりに早すぎる。

この12月1日、東京・浅草にある浪曲定席「木馬亭」でトリを取った武春は十八番の「南部坂雪の別れ」を語った。名曲師・沢村豊子の三味線にのって大石内蔵助と浅野内匠頭の妻との別れを熱演。病気の後遺症を感じさせない裂帛の気合、声や調子の良さに場内は陶然と酔った。この高座が私にとって最後だった。

武春は浪曲界の救世主的存在、太陽だった。旧来の浪曲のスタイルにとらわれず、ロックやR&Bなどを取り入れた独自の高座を確立し、浪曲(浪花節)という枠を超えた音楽ジャンルを作ったエンターティナー。NHK・Eテレの子ども番組「にほんごであそぼ」などで人気を集め知名度は全国区だった。

19歳で浪曲界入りした武春は、当時はまだ活躍していた名人・芸人たちのカバンもちをし、浪曲の神髄を肌で知る。

長田 衛

おさだ・まもる 1952年宮城県生まれ。雑誌編集者を経て、浪曲を中心とした演芸を評論。著書に「浪曲定席 木馬亭よ、永遠なれ」。

国本武春さんを悼む

独自の高座 浪曲界の太陽

高座では諸先輩の芸や人となりを振り返り、「浪曲は歌あり物語あり、リズムあり、笑いも涙もある。一人で演じられる総合芸。ぼくはみんながやめても浪曲は続けます」と浪曲に命を懸けていたのだ。

武春には現代性と笑いのセンスが備わっていた。ある夏の高座で、「暑いですね。つぎは海水パンツ一丁で演じていいですか」と笑われた。持って生まれた愛想の良さも持ち味だった。健康な人生観に満ち、語る内容は勧善懲悪や親孝行で説得力が豊かだった。武春の両親は浪曲師。母親の国本晴美(78)は現役、サービスピ精神が旺盛だ。晴美が浪曲を語る時は武春が三味線を弾く(武春は三味線の名手)。「いよっ、親子鷹」という掛け声がかかったものだ。

得意の演題は「赤穂義士伝」「佐倉義民伝」「暎の母」など、オーバードラマチックなお客を楽しませ、感情の動きを節で情緒たつぷりに伝えた。「紺屋高尾」では花魁が男の純情にほだされるところ、ありえない話を信じさせる芸の力を発揮した。



三味線の弾き語りをする国本武春(大阪府)

沈滞状況にある関東浪曲界だが、武春は日本浪曲協会副会長を務め、後進の成長を促した。玉川奈々福、玉川太福、東家一太郎ら若手が注目されている。浪曲界の再生のためにこれから何十年と高座に立ち続けるはずの人だった。25年以上見続けて、一度たりとも凡席のない青年横綱、名人だった。

浪曲師の国本武春さんは昨年12月24日死去、55歳。